

## かけがわっ子ひろば 夏休みイベント特集 1

夏休み前半の「かけがわっ子ひろば」のおもなイベントとして、工作教室が2回にわたって行われました。指導者はいずれも掛川地域力向上委員会のメンバー。何人かの保護者にもお手伝いをいただきました。夏休み後半にはスポーツフェスタスタの踊りの練習や、そうめん流しも行われました。

7月25日（月）

竹を使って、水でっぼう作り！

子どもたちは竹を切るのに苦労しましたが、最後にはでき上がった水でっぼうで水をかけあいながら楽しそうに遊びました。



慣れない手つきで竹を切る子



できあがった水でっぼうで水の飛ばし合い

7月29日（金）

ペンダントとペットボトルロケット作り！

ペンダントは、リョウブの木を輪切りにし、裏表をサンドペーパーで磨いてイラストや自分の名前を描いて紐を通して完成。

水筒につけてタグ代わりにしたり、お父さんのキーホルダー用にプレゼントするといった一人で何個も作っていました。



輪切りの木にイラストを描く



できあがったペンダント

おもに高学年はペットボトルロケット作りに挑戦しました。

ペットボトルを加工して羽根をつけ、水を入れた後、空気入れて圧縮空気を送り込んで飛ばします。牛乳パックで作った4枚の羽根をバランスよく取り付けるのがむづかしかつたみたいですが、非常によく飛んで、みんな大喜び。小学校の運動場で飛ばしましたが、脇の山の中にまで飛んで行ったものもありました。



ペットボトルに羽根をとりつける



ペットボトルロケットに水を入れて発射準備



発射台に取り付けられたロケット



発射台から勢よく水を噴射しながら飛ぶロケット



みんながつくったペットボトルロケット

## 活動報告 **お助けたい始動**

7月下旬、定光寺町でお助け活動を行いました。民家の屋敷周りの雑草刈りと花壇の草取りでした。女性3名、男性1名のたい員が出動し、1時間半ほどで作業を終えました。

花好きの家庭なのか、庭には種々の花々が植栽され、玄関前の水路脇にまで満ち溢れていました。高齢で一人住まいの方なので、今までは除草作業が大変であっただろうなと思いました。



## オオサンショウウオ巣穴清掃

7月3日（月）、下半田川町内のオオサンショウウオ人口巣穴とその付近の蛇ヶ洞川の清掃が行われました。市職員と地元住民、瀬戸市民のほか、小西砕石工業所や大橋運輸の社員・家族など、約70人が参加しました。

人口巣穴からは体長97cmのオオサンショウウオが、その近くでは60cmと51cmのオオサンショウウオが見つかりました。岐阜高校の生徒と教諭も参加し、研究調査（DNA鑑定）のために、オオサンショウウオの尻尾から試料を採取しました。



オオサンショウウオの体長と体重を測定します

## オオサンショウウオによる怪我に注意！

7月29日（木）、蛇ヶ洞川でオオサンショウウオに指を噛まれ、大怪我をするという事故がありました。

瀬戸市主催の河川生物調査をしていた調査員（40代男性）が蛇ヶ洞川で川の生き物を調べるため、川底のコンクリートの割れ目に手を突っ込んだところ、たまたま中にいたオオサンショウウオに激しく噛みつかれ、重傷を負ったということです。

オオサンショウウオは通常はおとなしい生き物ですが、目の前の物の動きには非常に敏感です。鼻先で物を動かしたりすると餌だと思っていきなり噛みついてきます。そして、大きな獲物には噛みついたまま体を回転させるので重傷になることが多いのです。

上あごと下あごには鋭い小さな歯が何本も生えていて、細かい鋸のような感じです。軍手をした手で歯を撫でただけでも軍手が切れて破れるほどです。不用意にオオサンショウウオの顔の前に手や足を出したり、むやみに巣穴に手を突っ込んだりするのは大変危険です。



オオサンショウウオに噛まれた傷跡  
(他地区での例)



オオサンショウウオの頭部骨格  
あごには細かい歯が無数に生えている

## ホームページ操作説明会に参加

「瀬戸発！まるっと地域力」のホームページに掛川地域力向上委員会も活動の紹介や予定を投稿しています。

7月7日（木）、瀬戸デジタルリサーチパークセンターで、このホームページの操作説明会が行われました。当委員会の広報部長と部員一名が参加し、中京大学情報工学部の関係者から説明を受けました。参加者全員が理解できるまで個別指導もありました。



瀬戸デジタルタワーの隣にある  
デジタルリサーチパークセンター

## 定光寺町の祭祀(民間信仰) お愛宕さま

火之迦具土神(火の神・農の神)の分霊来臨を願って各島で祀ったのが島まつりである。どこの島も山の中腹に祀られている。

東島は東海自然歩道宮刈池へ登って行く途中、水道タンクの横からしばらく登った所に祠がある。本来7月23日が祭りの日であるが、近年はその近くの日曜日に行われている。この日は午後から島の人が神前に集まり「たいまつ」を焚き、地元の人がこしらえてきた酒のさかなでお神酒をいただいた。現在の場所に遷されたのは明治中期である。



## <田の草取り> 掛川小学校



7月7日(木)  
午前中、小学校の学習田で田の草取りが行われました。

最初に児童が田に入り、続いてお母さんたちも一緒になって長く伸びた草を取りました。地域力の会員がお手伝いしました。



今年は、去年より蓮の花が多くピンクが濃く鮮やかに見え、きれいに咲いていました。毎日暑い日が続いていたため、朝の涼しいうちに作業をし、1時間ほどで終了しました。

## <蓮池草刈り> 定光寺山門

8月5日(金) 定光寺山門の蓮池で草刈りが行われました。参加者は約20名。

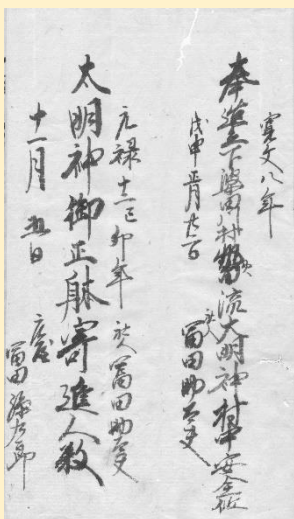


山論とは村と村とが山について争うことをいいます。近代まで、家庭や窯焼きの燃料として山から薪を取り、田畑の肥料や家畜の飼料として、下草を採取していたので、山は生活の糧として重要でした。また元禄国絵図が作成されるまで、山地の境界が不明な所もありました。

半田川には、2回の山論の記録があります。最初の訴訟は上半田川・下半田川両村と笠原村との山論です。上半田川・下半田川村は尾張藩領、笠原村は幕領で、尾張と美濃の国境紛争となり、笠原村が幕府の江戸評定所に訴訟を起こしました（元禄13年、1700年）。この時の訴状に庄屋孫九郎と書かれています。当時、農民などの庶民は公文書で姓を名乗ることができませんでした。しかし、元禄12年の神社の棟札（写し）から、庄屋は富田孫九郎とわかります。この時、下半田川からは富田孫九郎と戸松彦助が江戸に出かけました。そして、元禄14年6月22日に、両半田川村を

勝訴とする裁決があり、現在の県境が確定しました。江戸評定所から渡された大きな絵図（287 cm x 146 cm）は、最近まで、下半田川と上半田川で一年交代に保管しました。現在、市指定歴史資料として瀬戸市が保管しています。この濃尾国境争論はよく知られた史実ですが、孫九郎らの活躍については下半田川町でもほとんど知られていないと思われます。

ほぼ同時期に笠原は妻木と山論があり、この時も笠原村の方が理不尽の主張と判定され、笠原村の庄屋2人が入牢しました。そして2人とも元禄16年に江戸で牢死し



棟札(明治時代の写し)



富士宮神社に合祀された富榮神社の棟札

ています。この事から、直訴した庄屋が打ち首になったという誤伝が生まれました。

元文3年（1738年）に、今度は下半田川村と上半田川村との山論がおきました。水野御林方御役所に提出した下半田川村口上書で、「・・・白土峰通りに鳥屋跡がございます。80年以前に、成瀬一岳様を山に案内し、鳥屋がけをしました。その時、当村案内役富田孫九郎が鳥屋（とや）の杭と松葉を当村に取りいれました。・・・下半田川村庄や 半右衛門」と以前からこの土地を下半田川村が利用していたことをうたっています。この時も下半田川村の主張が認められました。

享保6年（1721年）の八剣社の棟札にも当村住人富田孫九郎と記されています。これらの山論に活躍した孫九郎は、明治32年、富榮神社に祀られ、現在、富士宮に合祀されています。また孫九郎に実子がいなくて、後継者の姓名が変わったと伝承されています。

会員の声

## 里山の価値

下半田川町 欄穂高

欄（ませき）穂高さんは、自然豊かな掛川地区に魅せられ、昨年5月に下半田川町に引っ越してこられました。この1年の感想を綴ってもらいました。

雨の前になるとあちこちで狼煙のように上がる「うやし」の煙。ケーンケーンと遠くでも近くでもない距離で鳴く野生のキジ。夕暮れ時にはヒグラシの聲がカナカナカナと山あい響き、シロサギが田んぼの上を舞っていく。

下半田川町に越してきて1年と少し。山に囲まれた豊かな自然の中で、妻と娘2人と、古くて新しい里山暮らしを楽しんでいる。

掛川っ子の妻とは違い、新参者の私にとってこの1年は驚きと発見の連続だった。まず、野菜がとにかく美味しい。妻がせっせと開墾した畑からは、トマト、ナス、キュウリなどの新鮮な野菜が毎日採れる。野菜の収穫は娘たちの楽しみのひとつで、今日も「お化けキュウリ」に大興奮。それだけではない。隣の実家の畑で採れたトウモロコシもすごく甘しい、近所のおじいちゃんが「採れたらあげるって約束したからなあ」と持ってきてくれたスイカもびっくりするくらい美味しい。新鮮なだけではない。育てる過程、収穫する楽しみ、心の込もったいただきもの、そうした食卓に並んだときに会話が始まるもの、それが「ごちそう」なのだ実感した。

妻が野菜作りに励む傍ら、私は薪ストーブの薪作りに挑戦している。豊田でシルバー人材の人に交じってチェーンソー講習を受け、人生で初めて、裏山の大きなどんぐりの木を1本倒した。自分が生きた以上の年月をかけて成長した巨木が、スローモーションのようにゆっくりと大きく倒れていく様は、すべての音が消え、

自分の体が大地と連なるように感じた貴重な経験だった。

さて、そんな里山暮らしが、少子高齢化が進行する課題先進国・日本を救うモデルであると提唱する人がいる。7月に瀬戸蔵で講演をした地域エコノミスト・藻谷浩介氏である。同氏は『里山資本主義』という本の中で、グローバルなマネー資本主義に依存する現代社会の歪みや脆さを補うものとして、代々の先祖が営んできた自然と共生する里山暮らしの価値を説いている。里山には雑木林や畑、田んぼといった食料、燃料、水源があるほか、縁と恩でつながる人間関係が残っている。そうした金銭換算できない価値が地域内で生み出され、地域内を循環する。それはお金に依存しすぎないしなやかな強さと豊かさを備えた時代の先頭を走る暮らし方であるという。

今、目の前に広がる美しい田園風景。この景色を創り守ってきた先人の思いを汲み取れば、むやみに地域の伝統を絶やすわけにはいかないし、娘たちのように未来を生きる人のことを思えば、地域の豊かな資源をそのまま残してあげたいと思う。そうした思いに至るとき、必然的に、私たちは手間と時間をかけた丁寧な暮らしを大切に、やさしくてあたたかい人々に支えられたコミュニティを守っていかねばならないのだと思う。

